

# 奄美大島原論への序

——古生代地質層の色相環に自然を感じる<sup>①</sup>——

原 宏 之

## 一・奄美の入口

奄美大島にはじめて訪れたのは、いまからちょうど十年前、臺<sup>うき</sup>が立つてからのヨーロッパ留学を終えて、就職と同時に横浜に居をかまえた年のことだった。たまたまのことに過ぎないが、わたしは同年の夏に「新たな生」をテーマにした処女作を二ヶ月かけて書くことに決めて

いた（実際に通勤の行き帰りの根岸線の中で書いた）。いま思えば「新生」と「奄美」は奇遇の組み合わせである<sup>②</sup>。島は数々のひとの生命を歓待し、蘇生させてきた。

わたし自身の奄美大島訪問は、たいそうな機縁によるものではない。画家・田中一村の作品をまとめて観るには、前年に同島に開館した記念美術館に行くよりほかにとの単純な思いつきから旅は始まった。同時に絨工場で労働し生活するとは、どのようなものか実地で考えた

(1) 本論文は、明治学院大学付属研究所二〇一三年度研究プロジェクト「南西諸島の総合的研究」(代表・著者)の年次最終報告の一部をなすものであり、他の部分はプロジェクト・メンバーの佐藤アヤ子教員およびGRIMES MacLellan Dawn Marie教員により、研究所年報「Synthesis」(二〇一三年度)に報告文が掲載される予定である。

(2) それは奄美大島が、西郷隆盛に政略を忘れさせ愛加<sup>あか</sup>那との休息の日々を与え、同じく島送りの身の名越<sup>なご</sup>左源太に『南島雑話』として島の魅力を描かせたように、客人<sup>まうと</sup>を迎え入れたり、また徳之島出身の詩人にしてロシア文学者の泉孤高に奄美自立の政治という新たな天命を与えた新生の島だからにほかならない。第三の新人の旗手、島尾敏雄には海軍特攻隊での生活から、文学の泰斗への道を、妻ミホは狂気の世界から和解へと、新生を授けてきた。奄美は、こうした歴史雑学の伝説だけの器ではない。神戸で労働しているときに阪神・淡路大震災で住処を奪われ、東京に出た途端に地下鉄サリン事件の被害となり、全国で湯治を試しながらもよくならなかった不随の半身が、宇検の浜で砂浴するうちに完治してしまったという整体師さんなど、島は「お邪魔します」とふさわしい姿勢で訪れた数々のひとの生命を歓待し、蘇生させてきた。ただ、奄美大島は昔から流れ者が東京や神戸での豪快な生活をほら吹いて渡り歩く場で有名なので、話半分に聴かなければならないときもある。

いと思っていた。一村は、周期的に紬の労働の日々と、そこで貯えたわずかな金で絵画作品の創造に打ち込む仕事の日々とを分けて、繰り返した。金がなくなれば、名瀬港で腐った魚をもらった。創造に打ち込むなか没したときには、一週間分の食糧にと煮てあったペースト状のかぼちゃが入った手つき鍋が見つかった。

先が尖りすぎて、いじめてもいうことを聞かない剛愎じょうぷくな奴は鼻つまみ者として総好かん、いつも独りかと思えばそうでもない。ごく少数である反面深く愛し支える者が必ず現れる。彷徨の最後に一村の生を迎えた仲間は、奄美大島の自然が織りなす木々であり鳥や魚であった。<sup>③</sup>

二泊三日の旅が実現した六月はアダンの実が煌々とした生命を漲らせ橙色になる時期で、何度も一村の画集で視たアダンがこれほど迫力と畏怖をおこさせる美しきものかなと、生命を象徴する威厳ある姿に圧倒された。一村のとくに奄美時代の絵は、濃緑の背景に橙色のアクセントを基調としているが、これは奄美大島の自然の色彩でもある。アダンはひとつの象徴のように、樹幹を覆う薄茶色の樹皮から横に割れたかすかな線から視かれるより明るい橙色の木肌、そこに支えられ

た深く濃い葉が伸びている。初夏となり、この葉がすっかり開くと、鮮やかな太陽のような、それでいて光のような暴力性をもたないやさしい橙色の実がまるまると顔をのぞかせる。アダンの実は最初、一村も「アダンの海辺」(一九六九(昭和四十四)年)で描いているよう



(写真1, 2=アダン (奄美パーク) ※本論文掲載の写真はすべて著者による2002-2013年の撮影)

(3) ここでは一村のことを書いているというのに、わたしの健康を心配してくれて自然薯の湿布で手当してくれてほどなく、当人が末期の肺がんで他界していった先輩「ちゃん」のことを想い出していた。「ちゃん」の暮らした鎌倉には観世音菩薩がよく似合う。菩薩のごときひととは、どこでも逢えるというわけではない。訳も分からず無性に足を運びたくなくて、踏み出した結果、生じたスポットに菩薩との邂逅が定められているのである。一村は太平洋戦争の間、生活のためのほりもの細工のほかは、ほとんど観世音だけを描いていた。一村が奄美在住中に千葉の実家(姉宅)に一時帰省した折の有名な写真、着物姿の横顔はどこか「ちゃん」に似た、透き通るような、優しくもあり鋭く突き刺すような眼光を放っている。一村は、生命の海に囲まれた生活のなか作品の制作に打ち込み、優しい眼となっている。

に、エクアドルなどの遠方から輸送されるバナナ船が果物が熟れて東京や大阪のスーパーマーケットに並ぶまでの期間を短く計算し過ぎたかのように、これから、生命の最盛期を迎えることを予感させる黄色と黄緑色からなる（アリストテレス四元色の対照色）。やがてアダンの実は、太陽の光を浴びながら全体が橙色になり、オレンジとなり、また黄色となり、茶色、見棄てられた色となり朽ち落ちる。蘇鉄は国道の海岸沿いはじめ、島のいたるところにある。英名《Japanese sago

palm》というように、椰子の一種であるが、細く点に向けて尖り立つ葉たちは、古生代の地質をもつ奄美の原始林があらゆるシダ類に包まれているので、その尖った形状からも、景色とも成らず背景とも成らず、悠久の時を感じさせるシダ類と同じような深い緑であり、その実は地味で陰鬱な褪せた橙色である。<sup>5)</sup>  
島全体が海洋のみならず溪流の水源に恵まれた奄美大島では、水辺に巨大な樹木が佇んでいる。木根が土の上に数メートルも陽に突き出

(4) アダン、阿檀は《Pandanus odoratissimus》(羅)、タコノキ科である。沖縄県にも自生する。ただし沖縄の各諸島のマングローブが自生するような場所に見られる(奄美にも自生する、住用町、加計呂麻島など)アオイ科のサキシマスオウノキのような、樹木の根が太くうねって裾を抜ける雄々しい姿とはずいぶん異なる。島民で歌手の元ちとせが島を歌うときの夜にだけ咲く百合のような趣ある。オーガスタでメジャーデビューした後、四枚のアルバムのみで、非現実な感覚を呼び起こす16ビート、それでも流れ去る時間に抗い此岸への滞留を感じさせるハーフシヤッフル、パッドの効いたリズムのなかで歌い上げられる悠久の時の感興である。

(5) 玄米や大豆と合わせて「ナリ味噌」の主原料、美味である。だが、蘇鉄は毒を含んでいて、毒抜きなしには食せない。大戦時の飢餓状態のなか、島民たちは蘇鉄の小さな実以外に食物がなく、多くの者が毒でやられた。「ソテツ地獄」といわれる。明治近代化からロシア戦争を経て、昭和の軍国日本の南方の戦線として奄美大島が重要視されたのは、島尾敏雄が描いた加計呂麻島の海軍特攻隊だけではない。大島と加計呂麻島とを結ぶ海峡沿いの西古見には陸軍の要塞跡など、いまでも陸軍の足跡が残る。現代でこそ舗装道路があるものの、島中央の名瀬港や西古見のある瀬戸内町の中心古仁屋港からであっても、たいへんな山越えであったはずである。奄美には固有種・亜種生物・植物が多い。そのなかにクワズイモという、芋の葉にそっくりなものがある。おそらくは山越えのため、原始林のなか、駐屯や南方への経路のため辿り着いた陸軍兵士たちは、これを食べ、命を失った者もいる。だが、島民は蘇鉄の毒を知らないわけではない。毒でありながらも、食べるしかない。

このことは奄美の地政学上の歴史を知る上で重要である。わたしたち日本に暮らす者は、古代文明時代の中国や朝鮮半島の近代における立場や、太平洋戦争後長く米軍に占領され、いまも世界に占める米軍の大部分、海兵隊のほとんどを引き受けている沖縄県にばかり、戦中犯罪問題、マイノリティ問題、差別問題として目が行きがちである(台湾をチャイニーズ・タイペイとマスメディアが呼ぶ現状についても考える必要があるだろう)。ところが、奄美大島は遅くとも一六世紀以来、絶えずヤマト(島津)と琉球に挟まれて、中国やヤマトの間で翻弄される琉球からはより古くから従属する土地とされてきたのであり、島津藩のサトウキビ栽培強制的歴史のみならず、一度たりとも差別と支配の連鎖を逃れることはなかったといえるだろう。



(写真3=大浜海浜公園のアダンの木)

して、ぐにゃぐにゃとうねりながら束となり大きな幹をつくるかと思えば、また幹から枝に分かれるところからも枝なのか根なのか区別がつかないような枝が驚くほど多く波打つように天の光を精一杯生い茂る葉に浴びさせている。がじゅまるなど、この島の常緑高木では珍しいかたちではない。それでもわたしが眼も心も奪われたのはアダンの実の強烈な橙色だった。大きなアロエのように鋭く尖りながら全方位に広がる葉の濃い緑によく映える。

## 二・田中一村の誕生

——米邨から一村へ、中央画壇からヤマトの果てへ

奄美時代の有名作、「ピロウとアカシヨウビン」、「エビと魚」、そして「アダンの木」など、家の図録で視ていたときに気づかなかったのは、これらどれもが古の原風景を感じさせる深く濃い緑色を背景に、可憐な橙色が前景のアクセントになっていることだった。緑色と橙色それこそがわたしをこの島に呼んでいるのだと思うこと思いこんだ。橙色は陽の膨張色、明らかに生命の昂進を感じさせる。緑色は夏に浮かれる小生物を静かに見守るような安定感・恒常性の色である。オストワルト色相環だとより分かりやすく、深緑の補色は赤なので、完全に映えるような対照色ではない。色相環の暖色の中央より濃い（鋭い）赤に一步だけある橙色、寒色に足を半分踏み入れながらも輝度がゼロの死を感じさせる黒から遠くに中庸を保っている深緑色、どちらもが陰陽五行説に基づく正食<sup>アキロヒ</sup>で言えば陽の範囲に収まりながらも、橙色は

花や高く伸び広がる果樹など陽、生命の力そのものであるのに対して、緑色はそこに平衡を与えている。

画技の神童と呼ばれながらも妥協しない頑なな性格のため中央画壇から離れて、戦時中・結核の時代にはひたすら観世音を描いていた田中一村（父がつけた米邨、自ら心機一転としてつけた柳一村の雅号もすでに捨てていた）は、一九五五年四七歳の人生の途半ばに西方への放浪の旅に出る。一九五八年、奄美大島に辿り着きほんとうの「田中一村」となった翌年に、「その後真実の芽はついに出不ず、それがやっと最近六ヶ月の苦闘によって再び息吹き」と友人の中島義貞に宛てて書いている。

四回目の訪問で、ある程度、宇検や住用の村の原生林や龍郷の海洋生物を知ってから気づいたことだが、一村の作品には若い時代のものからすでに、かたちと色彩が、奄美の自然に酷似したものがある。

「木（扁額）」（一九二七年）はがじゅまるの根のようであるし、千葉時代の作品「棕櫚」はピロウの深い濃緑とアカシヨウビンの赤橙のアンサンブルのようで、草花と蝶にはピロウの深緑とソテツの花の橙色があり、「黒の時代」とでもいうべき千葉寺時代にも土は黒くとも畑はオレンジ色である。ただやはり冥<sup>くら</sup>すぎる緑色、黄色すぎるオレンジ色が、一村と聞いて誰もが思い出すピロウやアカシヨウビン、ソテツ、五色エビの色となるのは、奄美での生活を始めてからのことのようにある。絡まる根のような木が細すぎても、橙色が黄色過ぎても一村のなかではすでに奄美の自然を描く気が満ちていた、定められていたその描く対象を奄美で発見したというよりは、弱い相互作用により奄美

の自然に逢着するように引き寄せられたのではないか。日本の絵画の歴史では、田中一村の色彩はカラフルといわれるかもしれない。でも、奄美の自然を実地で知れば知るほど、一村のアダンの葉は実際より暗くその背景の寒々しくも静寂で平和な海や大きな灰色の雲のひとつにだけ日が射して薄茶色の黄昏を感じさせるピロウも、実際よりずっと彩度もやや明度も低いことに気づくのである。どれもが実際の奄美の自然と生物よりも薄い控えめな色でさっと描かれている。もっともそもそも奄美大島のもつ色彩自体が「南国」などと一括りにできない、琉球ともまた異なる控えめなものである。

### 三．古生代の息づく生態系

金作原や湯湾岳の古生代から生きる固有種（古代種の亜種）、非現実的なほど巨大な樹木がつくる深い森を眺めると、その緑色の深さに霊的なものを感じて呆然とする。また、海底に素潜りしようと砂浜に行っても、すべて古生代の地層から成るこの島特有の地形で、高く聳える山、そのことごとくが緑に覆われた森、そうした山稜から旧直下するように海が開けている。波間と森の間に短い砂浜がある。この森を近くで観ると、ただの森ではない。イタジイやカシの類の高木、そこに寄り添うアマミシダなどのシダ類、アマミデンダ（奄美固有種、オシダ科）が、ブロックごとにそれぞれの緑のグラデュエーションをつくっていることに気づくだろう。そして森の終わりを告げるサキシマフヨウなどの花がある。奄美の風土とはいえ、左右上下に群生した

緑のグラデュエーションは、大和の原風景とはこのような景色のなか、名もかたちも時空もない力の根元から気象が分裂し、生物が生まれたものかと思わせる。奄美大島は、ソテツとその花、アダンとその他など、いたるところに濃緑と橙色の組み合わせが観られる。

森のグラデュエーションは偶然ではあっても理由のないことではない。この島は、何度も陸となり海となり島となることを繰り返している。二〇〇〇万年から一〇〇〇万年前に奄美大島は大陸の一部（中国・九州と陸続き）であり、ゾウ、アマミノクロウサギの祖先が到来している。五〇〇万年前に大陸から分離し、二〇〇万年前にまた陸続きとなったときに奄美の固有種となるイノシシ、イモリやトカゲの祖先がやってきている。南西諸島の現在のかたちが生まれるきっかけとなるのは、トカラ（黄河の河口部）が海中に埋没し、九州との間に大きな海水湖のようなかたちができることだという。それでも南西諸島の大陸側はまだつながっていたので、ハブやイノシシ、ネズミ類が渡ってくる。

南西諸島が完全に大陸から分離するのは約一〇〇万年前のことで、このときの群島の形成のあり方が、イリオモテヤマネコなど肉食獣の海を渡っての来島を防いだので、奄美大島にはクロウサギ、固有種ルリカケスをはじめとする膨大な鳥類、ヒカゲヘゴやモダマ、シダ類など、古代生物を忍ばせる独特の進化を遂げた、というよりはほとんど（相対性として）動いていない巨大な植物、原始生物そのもののような手足が短くからだの丸いつぶらな瞳のクロウサギ、ギャーギャーとうるさいが姿は美しいルリカケスのような珍しい鳥、珊瑚と、島嶼生



態系の見事な舞台となった。それだけではない。マングローブの群生する河が土砂を浄化して泥になるのを防いでいるように、島全体がひとつの里山のような生命の循環を成している。

そして、なによりも黒潮である。島の西方に黒潮の本流が北東に流れてゆく。インドネシアの諸島と陸続きのひとつの大陸のようなものが水没してからも、生物だけでなく文化がこの島に伝えられてきたことは丸木をくり抜いた舟や、漁猟のためのさまざまな道具、信仰する生きもののかたちの類似性などが物語っている。その上、奄美大島が独特なのは、島の東側にはちょうど黒潮が反転するポイントがあること。ヒカゲヘゴは巨大なぜんまいのようで、つい蕎麦にいられて食べたくなってしまし、モダマも枝豆のようにビールのつまみにしたいなあ、でも大味で美味くないだろうなどといってしまう。食べることは、きっと人間の、また生物の基本の行為なのだろう<sup>6</sup>。一村が描いた伊勢エビ（五色エビ、サユリエビ）は、約二万年前に奄美大島が現在のかたちを整ったときに生まれた。

#### 四．奄美の色相環

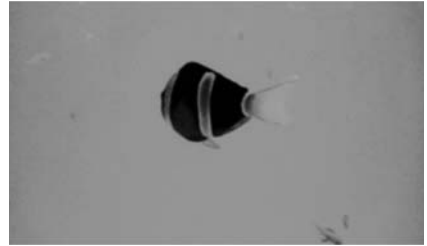
（マンセルの）色相環でいうと、奄美諸島のなか、とりわけ大島南部や加計呂麻島一帯の生態系ないし「景色」が、橙色（5YR）と深

緑色（5BG）あたりの補色の関係で構成されていることに気づいたのは、この訪島の度に感じる不思議でゆったりとした生命感を受けながらずいぶん遅くなってからのことだった。

森のグラデュエーションは偶然ではあっても理由のないことではない。この島は、何度も陸となり海となり島となることを繰り返している。

海中には、無数の種の造礁珊瑚と魚、そのほかの生物がいる。えんじ色のイシサンゴが多く感じるけれども、それは色が強くて眼につきやすいからで、緑色の先の尖ったエダコモンサンゴ、葉状の珊瑚、ミドリイシ系の珊瑚、そこに身を寄せて共生し珊瑚礁をつくる橙色の珊瑚類、緑であったり橙であったり両方でもあったりするウミシダたち、クマノミはオレンジ色のカクレクマノミだけではなく、尾ひれが緑のものもいる。アオブダイ（いらぶちゃ）だけがブダイではない、一村が描いたように色とりどりのブダイがいて、生息する珊瑚礁の色に成変化する。クマノミは強い（大きい）モノが雌、雌が死ぬと二番目に強い雄は雌に生成して、サンゴ礁につくイソギンチャク周辺の生息地の小世界の生成を維持する。ブダイも雌性先熟や一次雄だけではなく、弱いブダイが雌となることもあるなど不規則、不均衡なあり方で、境域 (milieu) の生成変化を保っているらしい（写真4—6 ※生態

（6）頭頸部の放射線抗がん剤治療は、口腔から喉までを焼き、組織もろとも血反吐を吐こうにも唾が出ないなど、もちろん相当な「痛み」をとまなう。頭髮が抜け落ちた時点で、身体の苦しみのなか、もはや人間としての体裁を保つ気力など多くの者が失う。しかし、個人的に観るならば、なによりも味覚を失ったときの喪失感、生きものとしての本能の欲求と欲望が織りなす根源的な部分の結節点の喪失ほど、意気消沈させることはないのではと思われる。



(写真4, 5, 6 = 奄美大島付近の海中)

系保護の観点から具体的地点は明かせない。

濃い緑の木々のなかひととき映える和風の橙色の実を自慢げにならしたアダンに一時の別れを告げて、島でほぼ唯一だった舗装対面道路（国道）に入るとすぐに、道路の両即ち固有種に混じり植えられたハイビスカスやブーゲンビリアの鮮やかなマルチカラーが現れるが、目の端に焦点も合わさずぼんやりと背景になるだけである。なぜならこの季節、大きな蝶々たちがそれぞれの色と模様で、車のフロントガラスを縦横無尽にじゃまするからである。蝶々は「ねりやかなや」、死者たちが、死後に住む世界から戻ってきたときの仮の姿である。心が高ぶってくる。旧市内に入るシグナルのトンネルを抜け、港を後にして、ひたすら風景ともならぬ背景の市街を抜けて、金作原に着いて、足下のハブに気をつけながら進めば、巨大な薇わづらのような恐竜にも負けなかったと堂々と屹立するヒカゲヘゴ、古生代のシダ植物類、イタジイやタブノキ、イジュ、名も知らぬ檜ひのきにしては非現実的に巨大すぎる樹木たちが待っている。この原始の樹海で眼にする緑はこの世のものとは思えないほど真底深い。野生だ。

(7) 奄美大島での仕事が六月にできるなら、森に囲まれた、宿に泊まる。黒糖焼酎で早い時間から深い眠りについて、目が覚めそうになる夢うつつのなかからか細く美しい声の合唱、掛け合い、連歌が聴こえて、目を開いた瞬間にルリカケスのギャーゲーアという悦びの声に交じる歌の正体は、アカシヨウビンのフルートの調べのような声であることを意識して幸福感に包まれる。カーテンを開けると、ありきたりの南洋植物に比べると濃く深い緑の木々が見える。窓を開けて木々からその日生きるための混じりけのない空気をいただく。陽が上り始めた頃、ソテツをかき分けがじゅまるの樹を抱きしめて生命の感謝のことばを交わし、研究調査にでかける。

## 五、数十億年の自然（じねん）

## Ⅱ 個体化の運動をわずかに二百年で止める近代人

NHK教育テレビによる田中一村の三度の特集番組、奄美パークの開設、サブカルチャーや団塊の世代の移住先としての沖縄ブームなどのなか、奄美大島もここ十年で観光産業化が進んだ。いまではゴルフ場やシーカヤック、パラグライダーと、石垣島顔負けの振興がある。旅行客の姿もずいぶんと変わった。奄美は鹿児島県であり、沖縄県の離島と較べると学校を中心に、行政による比較的手厚い環境整備が見受けられる。ただし、労働はない。本土の東京からみて、公務員や教員というエリートを除けば、民間セクターでのホテル従業員や道路建設労働を除いて、被雇用者の賃金はとても安い。だから家賃月額一万円程度の団地がある。

他方で、空港の位置する北部、龍郷町を中心に、かつてのサトウキビが象徴するあらゆる資源に乏しい地域であった笠利町など、経済活動が本土基準で進んでいる。これら北部の別荘地は、数億円するまでに地価や家屋資産が高騰している。

この間、世界で初めてマンゲースの退治に成功した。だからいまではアマミノクロウサギの姿を見ることもできる。他方で、島民の家畜であり家族であった山羊たちは捨てられ、害とされ、捕獲処分されている。金作原はもはやかつての古生代の風景ではない。環境保護区域

が半径一キロもなかった。金作原の中心の砂利の広場には、四輪駆動車でガイドに連れられた観光客たちが賑わう。カラスバトの姿もあまり見かけないが、この間の急激な変化はルリカケスの絶滅危惧種への移行だろう。電線でもどこにでもいた鳥である。クロウサギや（リュウキュウ）アカシヨウビン、イシカワガエルやオットンガエルは、人氣があり、観光資源として手厚く護られる。山羊はそうではない。

わたしは侵入者なのだからじゃまをしてはならない。自らが生きること、生成変化することは、いつでもその環境、大地、海に影響を及ぼす。対生成、形質顕成（transduction）準安定のなか、相対物や環境変化（温度など）のずれで均衡を失った存在者が、自己と相手の双方と環境全体のなかで生成変化する顛動、顛沛による生成変化、S. Gilbert Simondon）、個体化、あるいは共一出現、どのように呼ぼうと、わたしたちは和辻倫理学のいう人—間（倫）<sup>なかま</sup>だけであるのではない。自然のひとつひとつの生命や物質との相互作用という環境に生きている。四〇億年前に生命が地球に誕生してから、二〜五億年かけて原核生物、約一〇億年かけて光合成を行う生命が出現する。そうした気が遠くなりそうな時間の古生代（五・四七億年〜二・四七億年前）の姿をそのままに保つ密林を前にしたら、新生代（〇・六五億年前〜）の、それもやっと約五〇〇万年前に誕生した人類など自然の小さな一部でしかない。生命は細胞の複製も含めて、それを包み込む自然全体の数々の運動をつづける均衡から成っている。

一三七億年前のこと、無の箱（空）から宇宙が出現したとき、つま



り時間と空間ができたとき、それは顕微鏡でも計れない微小なものだった。一秒間よりもはるかに短い瞬間にエネルギーは膨張して、1 cmにまでなり、まだ1秒にも及ばない間に斥力により宇宙は広大なものとなりはじめ、 $1/1000$ 億秒で重力や電気磁気といった馴染みのある力、 $1/10000$ 秒で原子核（陽子、中性子）、電子、またクォークなど、力と物質の判然と区別されないものが出現する。聖書が「混沌」と呼び、古代中国思想が「気」と呼ぶ、かたちとなかみ、形相と質料の区別のないエネルギーの塊である。なぜものが生成し存在するのか、なぜ生命のような運動が生まれるのか、二〇世紀フランスの哲学者ベルナール・シモンソンは、熱力学に借りたモデルで森羅万象の生成、つまり個体化を説明しようとした（河の流れのように絶えず姿を変えざる準安定状態のエネルギーの塊である前個体からかたちとものを備えたあるモノ（有機体／無機質）が顛動顕成 transduction される＝個体化のプロセス）。生成、生成変化、「実在する存在の生成」とは形質顕成であり、それは端的に「相転移」である。微細な変動が生命の海である前個体の安定に変化をもたらし、新たなものを出現させる。温度という条件下（媒体）により、水は液体から気体（蒸発）になったり固体（氷）になったりする。それと同時に周囲の条件（環域）の方も、温度が下がったり上がったりする。しかも生命は自己を複製することで、生命を断続的ではあるけれども恒久的なものとする。

遺伝子研究の影響か生命ある身体という蛋白質に注目が集まるし、ダイエツト誌がいうように身体のほとんどの質量が水分だということも事実である。だが、炭水化物は水分を除けば人体の三分の二を占め、

またわたしたちの約六〇兆の細胞のなかには、それ自体が固有の遺伝子をもつ単細胞のミトコンドリアが共生している、生命は数々の運動をつづける均衡から成っている。

## 六、奄美大島から生命を見つめ直す

筆者は二〇〇二年、最初の訪島の直後、つぎのようなメモを残していた（一村の本から出てきたメモ切れ端）。

気まぐれで始まった旅なのに、はじめての三日間の感触で、ここは自分が住むべき土地だと思ひこんでしまった。随行者にいわせると「肌が合うんだよ」。わたしのことでは、奄美大島はわたしと「気が合う」。島にいると、譬喩でなく物理的な感覚で東京とは違う時間の流れを感じる。空港を出て島の風にあたった途端に身体が軽くなり、身心が優しく元気になる。群島のなかでも、わたしの場合、大島だけが、呼んでくれているようである。

二〇一二年の訪島の際には、つぎのようにワープロに書いている。

不安もある。同じ視覚であっても、投影されたスペクタクルではなく、自ずから成った奄美大島の濃緑と橙色にも人為の手が及びつつある。豪雨・土砂もあるのだろうが、森の山の頂き付近に不自然に点在する逆三角形やダイヤモンド形の剥き出しの赤土は、明らかに開発のための低地の伐採から生じたものだろう。「禿げ山であっても、君のいう緑と橙じゃないか」など後生だから言わないでくれ給え。人工テクノロジーが木々を殺した痕跡の死と陰の感覚<sup>サンシャイン</sup>と、アダンの実が示す生命力漲る陽の恩恵がまったく

違うことを君にも感じて欲しい。禿げ山は黄昏を予感させる、熱力学的な死だ。古生代からの息吹と鼓動を、近代に強烈な人工のネガエントロピーが燃えさかった後に、あらゆる運動を永遠に停止させる刻々のタイムが君には聴こえないだろうか。ぼくなら、この奇跡的な自然、「生命の多様を運ぶ箱船」を夢見ているうち、ふと「嫌な夢」と信じたい現実に戻された哀しみのあまり、奄美島唄風のファルセットヴォイスで、「あの山では赤土が……」と唄いたいくらいだ。

わたしは、奄美の観光業振興を責める思いもないし、環境保護のためにもルールを守れなどと他者に口うるさくいうつもりもない。金融資本主義のなか、資本金もなく、観光資源が主だった商品であり、そうして生活するしかない。いささかの憤怒にも似た思いがあるとするならば、一九世紀から加速してきた視角・市場主義社会に対してであるかもしれない。

当然のことながら生活者たちを責めてはいけない。北ではアイヌコタン（アイヌ民族集落）がスペクタクルショーとなり、南では御岳（うたけ）が入場料制になっていることも。自己自身より尊いであろう存在を晒すしか生きる道のない社会、経済、政治、環境、テクノロジー生活を身につけてきた東京に住むわたしたちに批判する資格はない。アイヌ民族が、なんと自己の住まい、生活を、自己の存在を商品として生きるしかない哀しみは、わたしたち東京人にはとうてい共有できないだろう。宗教の神聖なる舞踊を、わずかばかりの入場料を払ってお客さま気分になったほろ酔い加減の観客たちに差し出さなければならぬ思いを、ことばにすることができようか。

ほんの二十年前まで奄美で木を伐るときには、ケンムン（奄美の木

の精）のご機嫌を伺わなければならなかった。しまんちゅが忘却したんぢゃない。やまとんちゅがないことにしよう追いやった。テクノロジーのなか、「魂（心、アニマ、アニムス）」は、ますます「精神（エスプリ）」のことだと信じ込まれるようになった。脳科学の発達で、心は脳の機能と同一視されるようになった。でも、いくら解剖しても心は見つからない。なぜなら、それは視えるものではないからである。精神は幽霊のようなものでますますつかみどころがない。わたしたち身体、身心の六〇兆の全細胞の「一般意志」（ヘルソー）こそが、心の正体の一片をかいま見させる。わたしたちの皮膚や感官、内蔵器官をつくり、血液をつくる細胞は、毎秒数百万個が死に、数百万個が生まれる流動的なものだ。どこかに変調があると「気分」も変わる。細胞は結晶のように個体化してかたちをもつ、耐えざる運動のなかにある。だから身心は揺れている。振動している。わたしたちが発する振動、リズムは宇宙（気海）と呼応する。わたしが発する振動、揺れは宇宙全体のバランスに影響する。その宇宙からわたしはエネルギーを受けて生きている、生成の分裂をつづけているのだから、その変調はわたし自身に還ってくる。宇宙のなかにいて、宇宙をつくっている。わたしが観ているアルゴルが、あなたの北極星であっても一向に差し支えない。どこか深層で根が繋がっているだけで、わたしの宇宙とあなたの宇宙は違うだろう。アルデバランように色と姿を変えながらも複数の宇宙をつなぐ根があればいい。根元、混沌、前个体、気海、無象のエネルギーの塊から生まれ、玄牝からその根が観えればもっとよいかもしれない。根は、奄美のような地で自然を感じないことには、

複製技術メディアでは視えない、ただそれだけのことだ。相対性とはそういうことだろう。

わたしの南西諸島体験の縁起は、奄美訪問の前年、宮古島での少女の心のままに老いた純真な婦人との一期一会にあった。西表島でも、菩薩のごとき方々と出逢った。与那国島では、山羊だった。菩薩は馬にも山羊にもなる。人間関係のストレスで疲れ切っていたわたしに飛びついてきたこの山羊は、たちまちわたしの得難い親友となった。ところで、わたしは奄美大島では、まだ旅先の菩薩と出逢っていない。きつと客人まろうとを迎えてくれる菩薩、奄美大島に欠けているそのひとは、いつか菩薩に突然変異したわたし自身にほかならないから出逢うことがないのだろう。でも、最近の滞在ではこれも偶然に地球に一番近く月の妖しく大きな橙色の姿に遭遇した。わたしがこの島に住むときに、歓待し、「気が合い」、ひとつの宇宙をつくるために待っているもの、それは目には見えないし耳にも聞こえないこの島の風土のリズム、そのリズムをつくる木々、鳥たち、魚、珊瑚、自然なのであろう。「感覚サンスや感カン興キョウは、知覚に還元できない。ドゥルーズのいうように、たしかに「いっさいはヴィジョンで生成」なのかもしれない。だが、後期近代人のわたしたちは、観想を忘れ、諸媒体に投射されるものを視ながら、感カンじること、そのものの能力を失いつつあるのではないかしら。